大分県芸術文化振興会議会報

芸振

No. 44　54. 10

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・挾　間　正　年　編集人・尾　登　一　信

第15回大分県芸術祭を迎えて

大分県知事　平　松　守　彦

郷土大分県の芸術文化の振興を図ることを目的として、昭和40年に大分県芸術祭が創設されてから、ことしは記念すべき第15回を迎えました。「十年一昔」ということばがありますように、15年の歳月は、決して短いものではなく、芸術に対するひたむきな努力が、年々歳々積み重ねられて、今日のよろこびの日を迎えたのであります。

かえりみましても、第1回芸術祭の参加行事は20余り。第11回において56行事、第13回に至って84行事となり、昨年の第14回には、実に105の行事が参加しています。

これは、各ジャンルが、それぞれの特色を生かしながら、相たずさえて、芸術祭を盛りあげてきたことを物語るものであり、また、大分県芸術文化振興会議をはじめとする関係者の苦難に満ちた歩みの跡ともいえましょう。私は123万県民と共に、ここに大いなるよろこびと、深甚の敬意を表するものであります。

さて、私は、県政の推進にあたっては、創意と工夫をこらし、未知の分野を切りひらいて産業と自然、そして文化が融和し、身も心も安らぎのある地域社会をつくりあげ、誇りと自信をもって住める郷土を創造することを願い、「協調・創造・健康」を県政推進の基本理念としております。特に、活力ある人材の育成と、個性ある地方文化の創造には全力をあげて取り組み、郷土大分県にふさわしい優れた芸術文化の創造発展に、県民みなさん方とともに最大限の努力を傾注してまいりたいと考えております。

幸い、みなさん方のご要望のありました「大分県芸術文化基金」の設立については、条例の制定や予算措置も終わり、その活動も緒についておりますので、今後とも芸術文化団体の育成・公立文化施設の整備などにつとめるとともに、創作活動の援助指導と、芸術文化鑑賞の機会提供という両面から振興を図ってまいりたいと思います。そのためには芸術文化を愛し、芸術に親しみ、ふるさとの優れた芸術文化を育んでいかれるみなさん方が、自らの英知と自らの手によって、その道を切りひらいていく「創造」の精神がなによりも肝要であります。どうかみなさん方の、たゆみないご精進とご活躍を心から念願いたします。

輝かしい歴史をうちたて、記念すべき第15回を迎えました大分県芸術祭は、開幕行事も県下各地で行われ、地域における芸術文化の振興に寄与するよう計画されております。また、国際児童年にあたり、多くの子どもたちが、この祭典の主役として登場してまいります。10月1日から2カ月間にわたって県内各地で開催されますこの芸術祭の諸行事が立派に花を咲かせ、実を結びますよう祈ってやみません。

演劇を創るということ

県民演劇・事務局長　中　沢　とおる

ものを創るということは、なかなか大変なことだ。この世のどこにもないものを、自分の力で創造するのだから、鼻唄まじりに寝ころんでできるはずはない。

もちろん、創造するのであるが、どう転んでも、それは人類の芸術文化の創造史を土台にしていることにまちがいはない。土台もないのに創造できるなんて、神様でも無理だ。その無理をしってかしらずにかやってのけたのが中国の文化大革命であった。既存の文化芸術をすべて否定し破壊しようとした。結果は全世界に証明された。前衛演劇に固執する一部の演劇人にそれに似た人々がいる。ギリシャ古典劇から近代劇までの歴史を否定し、近代劇で確立されてまだ日の浅い戯曲や演出の力を否定しようとする。それは別な視方からみると、他愛のないお遊びなのだが……そんなものには進歩はない。

演劇は、限られた舞台空間と、限られた上演時間の中で、演劇を鑑賞する観客と勝負しなければならない。映画やテレビは、拙いと思えば撮り直しがきくが、演劇は幕があいたら、どんなことがあっても後もどりはできない。

演技力はもちろんだが、骨格になる戯曲、観客をドラマの世界へ訪う演出の全体をまとめあげたテンポとリズムがなければ、役者がどんなに力んでも、お客はざわつき、果ては席をたち始める。演劇は総合芸術だが、観客から拍手喝采を受けるのは役者である。役者はつねに演劇を学び、社会を学び、芸術全般を学び、自分自身の教養を内深くためていかないと、自分のおかげで舞台が成功したんだと不遜な自慢れをもってしまう。戯曲をかき、演出をするのも、鋭い観察、あり余る程の資料集め、ドラマ全体をつなぐ濃密で緊密な計算が必要で大変なことだが、演劇のわかった役者を育てるのはそれ以上に骨のおれることだ。

そんなことを繰返して７本目の創作劇「ふるさとが燃える―大分の空襲より」を上演した。御期待に応え得たか御叱正を待ちたい。それにしても開幕行事とは、気ばかり不必要にあせって、しんどいものである。

[redacted]

県芸術祭開幕行事について

「ふるさとが燃える」に出演して

県民演劇・キャスト　向　畠　秀　隆

第15回大分県芸術祭開幕行事、県民演劇制作協議会第７作「ふるさとが燃える―大分の空襲より―」は、当時の大分を舞台に戦時下の人々の生活が繰り広げられる。

戦時下……。戦争を知らない世代にとって不可解なそれこそ絵空事としか言いようのない状況、諸々の資料を参考にしても苛立つばかりで、そのうち体験者に対して一種の羨望さえ生まれてくる。と言っても役づくりの上での事なのだが。更に、羨望が怖さに変わるともうお手上げである。

「一体、戦争とは」

この問い掛けに、答を一つ用意してみた。

「日常性の破壊」

１日１日の生活を改めて考える。その作業を戦争時に照らしてみる。そうすれば、当時人々の生活がいかに曲げられ抑圧され破壊されていたか、それがわかるのではないのか。日常性の破壊。この言葉によって戦争と向かい合えるのではないのかと思う。

戦争を口にすることはたやすい、けれど考えることは難しい。よく口にするが、考えようとしない。それを、「ふるさとが燃える」で感じ、考えていただこうと思うのである。肩肘張らずに楽しく観てもらい、かつ真剣に戦争をみつめてもらいたい。戦争を鏡に、現在の姿を映してもらいたい。そして、平和を、人間を考えてもらいたいのである。

県芸術祭は15周年を迎え、量から質への転換期にきているという。その開幕行事を県民演劇が行う。県民演劇自身にしても大きな節目の作品である。区切りをつけようとするにふさわしい題材―戦争。すべてについて現在を捉え直すに恰好な題材である。

主役古沢吾郎に取り組んで、多くの事を学んだ。特に記しておきたい事、それは演劇活動を通して地方文化創りに参加しているという事。そこには自らの偽りのない生き方が反映されていなければならない。

25歳の自分、今、青春の大きな節目に立っている。

[redacted]

大分県児童文化祭「ふるさと大分」について

大分県児童文化研究会長　三河尻　修二

閉幕行事、大分県児童文化祭「ふるさと大分」は三つの内容から成り立っています。

第1部は吹奏楽です。

西日本吹奏楽コンクールに出場して優秀な成績をおさめた、大分市立土子中学校吹奏楽部による演奏、同校岡村隆夫さんの指揮で、ビューティフルネームその他を聞かせます。50名を上まわる部員による演奏は会場を圧するものと思います。また、聞かせるだけでなく、演奏に合わせて会場の子ども達に歌ってもらおうと考えています。

第2部は舞踊です。

大分の各地に古くから伝わっている、いろいろな遊びをとりあげて舞踊にしました。「やっせっせ」「まりつき」「なわとび」など遊びにともなった歌がたくさんあります。それら歌の採符ならびに編曲は、民謡研究家として知られている加藤正人さんに、舞踊は平瀬克美さんの「ゆりかご舞踊研究所」にお願いしました。加藤さんをはじめ、県警音楽隊長の工藤紘喜さん、大分笛の会の会長・野村直彰さん、琴師範の鶴田恵子さん、そのほかの方々の伴奏、附属小学校の渡辺太郎さんの指揮で同校音楽クラブの子ども達が歌います。また、舞踊と舞踊の間に、附属幼稚園、小中学校のお母さん方のコーラスで「宇目の歌げんか」「姫島の子守歌」が入ります。

第3部は「かげえ」です。

「久住のから池物語」「大分の瓜生島物語」を中心に、大分の昔話を「かげえ」にしました。児童文学者・佐々木憲一さんの脚本、上野丘中・安部康英さんの人形デザイン、金池小・山元正名さんの演出で、大分市の人形劇団「ともしび」が中心となって出演します。二つのスクリーンを効果的に使ってみたいと思います。

私は、この閉幕行事を、国際児童年にふさわしいものに、芸術文化の底辺を拡げるのに役立つものに、また、多くの方々の協力によって児童文化の振興をはかるものにしたいと願っています。

[redacted]

県芸術祭閉幕行事について

影絵「大分県の昔ばなし」

人形劇サークル「ともしび」　山元正名

大分県の児童文化活動は昭和初期からの長い伝統を持ち、県芸術祭にも当初より大分県児童文化祭、大分県人形劇フェスティバルなどの行事を、毎年県下各地で催し参加しており、いつか開閉幕行事のいずれかを児童文化部門で、との声が以前より出ておりました。国際児童年の本年それが実現し、影絵「大分県の昔ばなし」の上演を担当することになりました。主体となる人形劇サークル「ともしび」は、指人形による人形劇を主な活動としており影絵についてはメンバーの大半が初めてとあって少々不安も残しておりますが、会場である芸術会館の構造、大きさの点から影絵を取り下げ、美しく大きな画面で大分県に伝わる民話を紹介したい、と台本を佐々木憲一氏に書いていただき製作に取り組んできました。

影絵の持つ幻想的な美しさを、淡い色彩効果と音楽、人形の動きなどで十分に表現したいと張り切っております。

現在、大分大学附属養護学校体育館を借用して練習に励んでおります。初めて影絵に取り組んで自分の操作する人形の影に思わず感動の声を発し、しばし見とれるなど、楽しみながらも上演日を目指して着々と進行しております。紹介する民話は六編あり、ひとつひとつこま切れになる恐れがありますので表現の仕方の変化などで、できるかぎり一つの影絵としてまとまった作品にしたいと工夫しております。影絵についてはまだ手がけたばかりですので、今回を足懸りにして、さらによい作品づくりに努力したいと思っております。

尚この影絵「大分県の昔ばなし」の製作にあたり器材関係、音効、照明、舞台、美術と多くの方々の応援をいただきました。この紙面をお借りしてお礼申し上げます。

[redacted]

第一回の県芸術祭がはじまった昭和四十年には、主催行事だけで共催（集中）行事はなかった。第六回（四十五年）から文芸、音楽、舞踊、演劇の中からそれぞれ共催行事がきまり、にわかに活気づいてきた。

また授賞についても、第四回（四十三年）までは毎年三ないし四の団体に賞がおくられていたのが、翌年の第五回からは一般賞以外に特別感謝状として県美術協会ほか三団体が加わり、合わせて七団体が授賞式にのぞんだ。六回の特別感謝状は個人に贈られ、以後は開閉幕行事などで特に活躍したスタッフなど個人に多く贈られるようになった。

さらに受賞の内容をみると、昨年（第十四回）から優れた行事の中でも、特に顕著であった作品や団体、個人に功労賞と新人賞が追加され、賞や感謝の意味を具体的に分けて贈ることになり、県芸術祭行事の充実ぶりを幅広く裏づけている。新人育成の立場から特に新人賞の設定は大きな意義があり注目される。今後

第15回を迎えた県芸術祭をふりかえって

県芸振会議・理事　菅　久

の賞の行き方が大いに気になると同時に楽しみである。

次に、第一回から十五回までを一覧表にしてみると、主催行事（開閉幕行事）で最も多いのが音楽部門の13、演劇の4、舞踊と美術の3、文化講座2、児童文化（本年度）1となっている。文芸はゼロであるが、文化講演を文芸とみれば、主催行事はすべてに行きわたっているといえる。今後は新しく加入した能楽や、今まで地味な活動をしてきた映画、放送や生活芸術、そして総合（市町村文化祭）のジャンルにまで手がとどけば立派なものであろう。

今までの芸術祭を見ると、どうしても舞台関係にスポットがあたり、華々しい動きが目につくがしかたのないことかもしれない。今後は陽のあたらない部門にも活躍してもらうために特に美術や文芸など優れた内容の企画をもって大きく大分県芸術祭を盛りあげる努力が一方には必要であろうと思う。

第15回大分県芸術祭主催・共催行事

部門	行事名称	期日＜期間＞	会場	主催団体
開幕行事 演劇	ふるさとが燃える —大分の空襲より—	10月1日(月)～2日(火)	県立芸術会館文化ホール	大分県民演劇制作協議会
閉幕行事 児童文化	第16回大分県児童文化祭 —ふるさと大分—	11月25日(日)	県立芸術会館文化ホール	大分県児童文化研究会
文芸	第15回大分県芸術祭共催 短歌コンクール	10月7日(日)	大分文化会館 第1小ホール	大分県歌人クラブ
	〃 第13回俳句大会	10月7日(日)	県教育会館大ホール	大分県俳句連盟
	第11回大分県川柳大会	10月14日(日)	大分文化会館 第2小ホール	大分県番傘川柳連合会
美術	第15回大分県美術展覧会	◦日・洋・彫・工 10月16日(火)～21日(日) ◦書道 10月23日(火)～28日(日) ◦写真 10月30日(火)～11月4日(日)	県立芸術会館展示室	大分県美術協会
音楽	第13回大分県職場音楽祭 音楽の夕べ —あなたと共に—	10月3日(水)	大分文化会館大ホール	大分県職場音楽連盟
	大分交響楽団特別演奏会 第九コンサート	10月13日(土)	大分文化会館大ホール	大分交響楽団
	第7回大分県音楽コンクール	11月4日(日)	県立芸術会館文化ホール	大分県音楽協会
	県民オペラ「赤い陣羽織」 ジュニアオペラ「セロ弾きのゴーシュ」	11月24日(土)	大分文化会館大ホール	大分県県民オペラ協会
	第13回大分県吹奏楽フェスティバル	11月25日(日)	大分文化会館大ホール	大分県吹奏楽連盟
演劇	大分県演劇祭	11月23日(金)	杵築市民会館	大分県教育委員会
総合	第4回大分県高等学校中央文化祭	11月19日(月)	中津文化会館	大分県高等学校文化連盟

大分県立芸術会館における芸術教育

大分県立芸術会館館長　山　本　峯　生

芸術文化振興会議から「芸術会館における芸術教育について」書いてほしいとのことであるが、結果としては「教育」になるかも知れないが、芸術会館としては、「教育」というようなおこがましい気持ちではなく、「県芸術の振興への手助け」の気持ちで仕事をしている。

さて、芸術会館が行なうすべての行事は、直接間接に教育的な機能を含んでいると言えよう。美術部門の展覧会もホール部門の諸行事も、一般県民に対しては啓蒙と啓発の作用をしており、専門家に対しては自己啓発のための啓示資料の役目を果たしていると思う。芸術会館の諸行事を、一般向け、専門家向けのどちらに比重をかけるかは深い配慮を払うべき問題である。この両面のバランスを考えながら、年間を見通しての各種行事を計画している。芸術行事はそれによって人々の生活に楽しみとうるおいを与えることが第一の目的であるから、行事の娯楽性も無視できない。従って、娯楽的要素と啓蒙・啓発(教育)的要素との兼ね合いも十分に配慮せねばならない問題である。行事を通して専門的な研修を行なうための「友の会」などの発足も、ぼつぼつ考えねばならぬ時期に来ている。また、教育的機能を高めるために、行事のあとで懇談会や研究会を開くことも計画すべきだと思っている。

芸術会館の直接的な啓発行事として、美術と音楽の長期成人講座を開催しているが、これは同好の人々に非常に喜ばれている。受講は若い人が多いが、中年・老年の方々も参加して楽しく受講している。現在は美術と音楽の二部門だが、将来は演劇・舞踊・書道・写真・工芸など、幅広く数多くの講座を持つべきだと考えている。さらに又、芸術教育は幼少年時代から行なわれるべきだと言われているので、幼小中高生らを対象としての各種講座を開く必要も痛感される。このため、近い将来に実習作業室などを増設したいと考えている。

芸術教育に望むこと

大分合同新聞論説委員　狭　間　久

友人のT君は高校時代、絵が得意だったそうだ。そのT君が、たまたま美術担当の教師から、自信作をほろくそに言われ、以来、すっかり絵をかくのがいやになったという。

これは最近、社会人となったT君が久方ぶりに絵筆をにぎった時、一種のにがにがしい思いを込めて、語ったことである。

考えてみると、私も一時期、絵が好きで、将来絵かきを夢みたことがあった。そのころ、美術の教師に連れられて、大分市へ（私は臼杵市に住んでいた）県美展を見に行った記憶が鮮やかに残っている。その教師は、別に何もいわず、好きなように県美展を見させてくれたが、帰りの汽車の中で、あの絵がよかったなどと、友達と熱っぽく語りあったのが昨日のように思い出される。

私の高校は普通科系で、ご多聞にもれず、進学、受験勉強でしごかれた。しかしそんな中にあって、絵を見たり、描いたりできる環境があったことは幸いだったと思う。芸術教育は、全人教育とつくづく思う。

その芸術教育を殊さら強調せねばならない現在は、不幸な時代だと思う。英・数・国・社・理などの進学課目と同様、芸術教育は大切にされねばならないが、それがなおざりにされるのは、進学・就職の試験に直接結びつかないからであろう。

そんな不利はあっても、私は芸術教育は十分尊重されねばならないと思う。ただし前に述べたように、普通教科以上に、これは〝人（教育）の問題だと思う。芸術（教育）に真に情熱を燃やす先生がいれば、多感な年ごろの生徒はなんらかの影響を受けるはずだ。

その教師が少ない。というよりも待遇が悪い。例えば県立高校で美術・書道・音楽の教師を見ると「教諭」は少なく「非常勤講師」「臨時講師」が圧倒的に多い。美術の例では教諭一四人に対し非常勤は二四人、書道に至っては兼任教諭一人に非常勤三一人だ。

芸術教育に望むことは、まず人の面で十分な手当てをしてほしいということだ。

「大分県芸術文化基金」

寄附金申込み総額ただ今　40,675,366円

昨年10月31日に西鉄グランドホテルで、大分県芸術文化基金設立発起人会を開き、県内知名士を協力者に仰ぎ、直ちに大分県芸術文化基金促進協力会を設立した。

11月3日、とくに文化の日をえらんで、団体代表、協力会メンバー30人余りが大分市トキハ前で街頭募金をおこなった。

大分市トキハ前での街頭募金

基金の目標額3億円（うち54年度は、4千万円で寄附金2千万円、県費2千万円）に対して、2月19日現在、寄附金の申込み総額は、つぎの通りである。

区　分	金　額	備　考
芸振会議	4,453,900円	企業申込額　33,500,000円 大分銀行　1,000万 トキハ　600万 梅林組　450万 佐藤組　400万 後藤組　300万 吉村薬品　300万 マリンパレス　300万
企業体	33,500,000円	
個人・一般	2,721,466円	
合　計	40,675,366円	

※未納団体は、早急に納入ください。

第十五回大分県芸術祭新人賞を受賞して

大分市民合唱団ウイステリアコール団員

中村勝利

一五年の伝統と歴史を誇り、他県に見られない大分地方独特の文化行事、芸術祭に参加する事は非常に意義の有る事と常々思っていましたし、県民オペラも過去何回か観賞させていただき、レベルの高さに驚いていました。

今年は大分交響楽団の一五周年記念公演で、ベートーヴェンの「第九」を演奏する、そのソリストの一員としてはからずも選ばれ、初めてのことで戸惑ったものでした。練習期間中も、無我夢中でうたいました。それはあっという間に過ぎ去ってしまったが、あの感激の波は今もはっきりと心に打ち寄せてきます。指揮者の加藤先生やオーケストラメンバーの心からの暖かい御支援、先輩ソリストの御指導、そしてコーラスメンバーの御協力に対しこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。一一月には、県民オペラ「赤い陣羽織」にも出演させていただきました。稚拙な歌唱と演技ではございましたが、私としては精一杯うたいました。桂先生、小長先生をはじめ県民オペラに携わる人達には言葉に言い表わせないほどお世話になりました。

この二つの活動がたまたま目にとまり、今回の受賞の対象となったようです。この賞は私が一人で受けるものではなく、一緒に活動下さった舞台上の人々、裏方の人々等皆さんが受けるものを私が代表して頂いたと思っております。

賞というものは、感激と自信と誇りを与えてくれるが、一方ではその人間に将来に向って一層の精進と責任を持つことを同時に教えていると思います。今回の新人賞受賞を機に、音楽を愛する一県民として、芸術振興のため微力ながら全力を注いでいくつもりです。

今後とも御指導の程宜しくお願い致します。

第15回大分県芸術祭賞等贈呈式

県芸振会議共催第15回県芸術祭は、85行事という多数の参加によって県内各地で開催、この程終了しました。県芸術祭では、とくにすぐれた行事等に対し各種の賞を贈呈していますが、今年は次の団体・個人に賞が贈られました。贈呈式は、12月25日（火）午後1時から、県総合庁舎内74会議室で関係者一同出席して行なわれました。

なお当日主催者を代表して江藤教育長、受賞者を代表して県民演劇制作協議会事務局長中沢とおる氏の挨拶がありました。

受賞者紹介

名称		受賞者	行事名	受賞の理由
芸術祭賞		大分県民演劇制作協議会	大分県民演劇 ―ふるさとが燃える―	開幕行事として、ふさわしい充実した創作演劇を上演し、県民文化の向上に大きく寄与した。
		大分県児童文化研究会	第16回大分県児童文化祭	国際児童年にあたる本年の閉幕行事として内容・構成ともにふさわしく、県児童文化はもとより広く県民文化の向上に寄与した。
功労賞		耶馬渓町中央公民館	第５回耶馬渓町文化フェスティバル	町をあげて文化祭を実施、内容も豊かでこれからの地域総合文化行事のあり方を示すものとしてその功績は大きい。
		三重町芸術文化団体連絡会	三重町合同芸術文化発表会	豊かで住みよい町づくりを目ざした文化祭を開催し、地域文化の向上に寄与した。
		大分県小型映画連盟	第５回小型映画祭	小型映画同好者の苦心の作品を発表し、さらに、県段階の組織にまとめ、将来の発展にそなえた功績は大きい。
		佐伯文化振興会	佐伯市芸術祭	地域文化の振興をモットーに、ふるさとに定着したものを数多く取り上げ、市民に親しまれる文化祭は、行事のあり方を示すものとしてその功績は大きい。
新人賞		中村勝利	大分交響楽団定期演奏会 県民オペラ「赤い陣羽織」	大分交響楽団定期演奏会における独唱者ならびに県民オペラ「赤い陣羽織」の代官役としての歌唱力はアマチュアとしてすばらしく、新人として強い感銘を与えた。
感謝状	特別感謝状	加藤公康		大分県のアマチュアオーケストラの常任指揮者として大分交響楽団や、県民オペラなどの成長に大きく貢献し、県内音楽グループの指導・育成に寄与した功績は顕著である。
		三ケ尻修二	第16回大分県児童文化祭 ―ふるさと大分―	大分のうた、大分のあそび、大分の童話の三部からなる児童文化祭を企画、閉幕行事を成功に導いた功績は顕著である。
	感謝状	大分県歌人クラブ等		第15回県芸術祭に参加、行事を実施し、本県の芸術文化の向上に寄与した。

＜れんさい＞

豊後水道の文芸 その5

大分大学教授　佐々木　均太郎

鶴見崎と「鹿狩」

国木田独歩の「鹿狩」は、彼が短篇作家としての地位を決定した代表作の一つである。明治二一年八月「家庭雑誌」に発表された。

独歩が同勢一一人の猟人たちに誘われ葛港から乗船して海上五里を行き中浦の猿戸浦に到着、そこから鶴見崎に至る険峻な山上で勇壮な鹿狩を展開した日の記録をもとにして創作されたものである。鶴見崎は、東中浦にあり元越山脈が豊後水道に突出した半島の先端にある地点で四国の由良崎と相対する。独歩は「鹿狩」の中で「爪先きあがりの小径を斜に山の尾根を横ぎって登ると、登りつめた処がつの字崎（鶴見崎のこと）の背の一部になっていて左右が海である。それよりこの小径が二つに分れて一は崎の背を通して、そのはずれに至り、一つは山の彼方に下りてなの字浦（中越）に出る。この三つの路の集まった処に一本の松が立っている。（中略）朝日が日向灘から昇って、つの字崎の半面は紅霞につつまれた。茫々たる海のはては遠く太平洋の水と連りて水平線上は雲一つ見えない。また、四国地が波の上に鮮かに見える。総ての眺望が高遠、壮大で、かつ優美である。（下略）」

こうした豊後水道を背景とした壮大・優美な大自然の中で少年が大鹿を射とめる息づまるような場面の描写がつづく。しかし、作品の結末は、中心人物「今井の叔父さん」が「独り子の鉄也さんが発狂して廃人同様の哀れな様となっていたのに突然家の猟銃で自殺を遂げ、もはや一縷の望みさえ失いはてた叔父さんが寂しい人間になってしまう。」という哀感に充ちたフィナーレで終わらせている。ここにも、豊後水道という大自然を背景に一小市民の悲哀が共感的に描かれている。

独歩の文学観は、大宇宙の悠久さ、大自然の優美さの中に、ただ孤独にひっそりと生きて死んでいく小民に対しての熱い関心と悲しみを創作へと進めていく。その根源的発想に最も大きく影響したのが豊後水道であった。

[redacted]

文化ニュース

◎第9回九州グラフィックデザイン展が、昭和55年2月19日～24日の間、県立芸術会館で開催されます。入料無料。

なお、本県関係の入選者は麻生勝水・加地昭生・中村正信・原美恵子の四氏でした。

◎昭和54年度九州芸術祭文学賞の中央選考が行われ、別府市の小山田正氏「一郎にすまぬ」が佳作に選ばれました。同作品は、KK文芸春秋発行の「文学界」3月号に掲載される予定です。

◎第19回県展選抜展が、昭和55年2月1日～7日の間、東京都美術館で開催されます。

本県からの出品者は次のとおりです。

日本画　豊田　静子 [redacted]

洋　画　麻生　　昭 [redacted]

彫　刻　辻畑　隆子 [redacted]

工　芸　前野　広洋 [redacted]

書　　大塚三重士 [redacted]

写　真　磯崎　　豊 [redacted]

＜芸館での催し物＞

◦大分の南画展　昭和55年2月26日～3月25日

観覧料　一般300円　高大生200円　小中生100円

◦メロス弦楽四重奏団　昭和55年3月28日　18：30～

入場料　一般3,000円　学生2,500円

矢田歯科医院

別府国際観光会館2F

TEL24－1876